

2021年4月17日(土)

老球の細道605号

授業(練習)の準備

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、あるところに豪快な保健体育の先生がいた。「保健」の授業は座学が中心なので、体育を得意とする豪傑先生は「保健」の授業は基本的に体育にチェンジし、雨でグラウンドが使えなかった時だけ教室で保健の授業をしたという。昭和の大らかな時代の話である。

晴耕雨読の発想で行われる豪傑先生の保健授業は、これまた豪快であり独特で、現役教員時代の私には都市伝説として伝わっていた。生徒に教科書を読ませる。適当なところで解説を加えるのだが、その解説は「その通り!」で終わり。そして「はい次!」と言って次の生徒に次のページを読ませる。そして同じように「その通り!」。その連続で50分の保健授業は終了する。教科書だから間違いはない。それを覚えればOKということだった。

私の高校時代の数学の先生は、授業の中で岩波新書『0の発見』等などの内容を本当に楽しそうに話をしてくれた。その影響か大学では岩波新書をよく読むようになった。また国語の先生(後に歴史小説家)は授業の合間に会津の歴史を話してくれた。今でも忘れないのは「会津は歴史上日本の中心になるチャンスが2回あった。一つは、もし関ヶ原の戦いの前に上杉景勝と徳川家康が戦ったら?そしてもう一つは、戊辰戦争の会津戦争で会津藩が勝利を治めたら?」という話である。それから私は会津の歴史に興味を持つようになった。

教える先生が教科書を型通りに教えるだけでなく、関連する内容で先生自身が興味を持っているところを、先生自身が本当に楽しく、熱く語ってくれた授業はいまだに記憶に残っている。余談、雑学類などもその先生たちは準備していたのだろう。私もそのようにやってみようと新米時代から退職するまで意識してきたが、満足できることは一度もなかった。

特に意識して準備したのが「保健」の授業だった。教科書の中(時には教科書以外の内容)で、私自身が最も興味を持っている内容をピックアップして、わからない部分、関連事項などを徹底的に教材研究した。その後50分のドラマのごとく起承転結のシナリオ(指導案)を作成した。特に「起(導入)」、の部分には気を配った。練習メニューでは「ウォーミングアップ」、落語では「枕」。ここで最初に「お!」「面白そうだ!」と思わせれば成功である。新聞の4コマ漫画、落語、朝日新聞の「天声人語」などからたくさんヒントをいただいた。教える内容を単に羅列するのではなくリズムカルに配列する。バスケットも授業もリズム。

本に書いてあること、簡単でわかりきったことだけではなく、新しいこと、難しいことをわかりやすく教えるのが指導者の義務であり、責任である。指導者自身が興味を持ち、しっかり理論武装して準備をする。そうすれば指導者が自信を持って指導できる。自信を持って楽しく指導しないと生徒には伝わらない。授業もバスケットも原理原則は同じだと思う。

いつも最後に行きつくのが作家井上ひさしの表現哲学である。準備もこうありがたい。

「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く、面白いことを真面目に、真面目なことを愉快地、愉快なことをいっそう愉快地に」